

郡内の小・中・(高)

学校教職員の職能研修団体である「公益社団法人下伊那教育会」は、発足以来今年で百三十二年余を迎える。この会は、明治十年代に郡下教育関係者の熱願により設立されてから、明治・大正・昭和・平成と、飯田下伊那の教育・文化の振興発展に大きく貢献してきた。

表題に示した読本は、今から八十年程前の昭和七年七月と翌八年六月に発行された百ページ前後の冊子である。いずれも表紙と扉は中村不折が揮毫し、だいたいの旧制の高等科・補修学校・中等学校初年級あたりの生徒を対象として編まれている。しかし途中に絵や写真は皆無で、すべて活字ばかりが並び、実際にはなかなか難しかったと思われる。

その編纂の目的と由来を、同本では「青少年の国民的精神を正しく呼び覚まし、国民文化の伝統を遺憾なく味識せしむることは：特に緊要なることの一つで：所謂、郷土の文化を正しく認識し、体得するにあることを思ふ。」⁽³⁾ 下伊那郷土読本はこの見地に立って：編纂する事にしたのである。

下伊那教育会発行の『郷土読本』

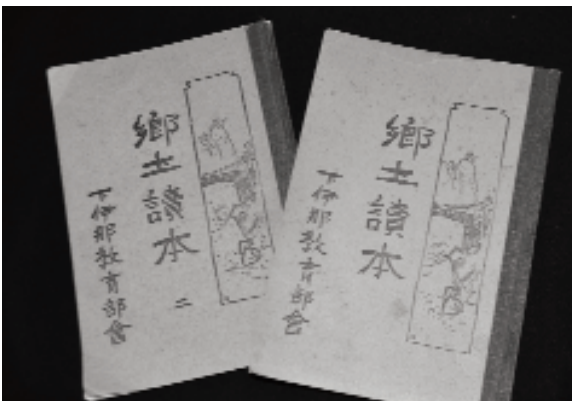
一 鎌倉貞男

種に及び、時代も古今を問わずいろいろである。昭和七年発行の読本は、明治以前のものに限られ、その全編もしくは一部を採っている。掲載作品は以下の通りである。

- ・信濃守藤原陳忠落人 御坂語 今昔物語
- ・木とく 賊 観世元清
- ・観世一代能の事 併木 賊刈の事 雨窓閑話
- ・和歌の道 太宰春台
- ・いななのなかみち 菅江真澄
- ・白山詣之記 對柳杜多
- ・示同学風流士等歌 千葉葛野
- ・その原紀行 藤井方宣
- ・都のつと 松尾多勢子

・李りか花集抄 宗良親王
・初 霞 大島蓼太・櫻井蕉雨
これを見ると、出典は『今昔物語』や『李花集』等著名な古典がある。著者は太宰春台や大島蓼太等よく知られた人物がいる。逆にあまり知られていないものを少しく解説すると、「雨窓閑話は」古今の雑話を集めた江戸末期の随筆集であるし、「對柳杜多」は上飯田白山寺の岩戸文書である。

この内、特に多くのページ数を費やして掲載されたのは、松尾多勢子の「都のつと」である。勤王の女丈夫としていかに彼女が尊重されていたかが伺える。それにしても、当時の生徒がよくこれだけの文語文を読みこなしていたものだと思心する。



下伊那教育会発行の「郷土読本」

前回に続いて、今回

も下伊那教育会発行の「郷土読本二」について紹介させていた

前年に続く昭和八年発行の読本には、以下の作品が採録されている。

で記述できなかったが、当時は今日の各郡市教育会が信濃教育会

・天龍川を下る 和辻哲郎

に一本化されていたため、編者は「下伊那教育会」ではなく、「信濃教育会」下伊那教育

・小さい暗った鏡 西尾実

部会」である。

・伝説 岩崎雨村

また、当時の同会会長は両角喜重であり、同会の中心も追手町小学校内にあった頃のことである。つまり、後

・注解平賀元義歌集抄 羽生英明

年、同会の拠点となる教育会館もまだ現在地

・寒かぜ 土田耕平

(仲ノ町)には建設されていなかった時であ

・島木赤彦 齋藤茂吉

る。従って、旧仮名遣

・旅衣 白田亜浪

り、これらの総て明治維新以降の作品である。

・勝峰晋風 荻原井泉

編集方針に明らか

・夜明け前 島崎藤村

いである点を除けば、

書きぶりも平明で前回

よりも読みやすかった

かも知れない。それば

かりか、時代が新しい

だけに作者や作品名

も、親しみやすかった

に違いない。

この内、「寒かぜ」と

題して載せられた三人

土の)伝説もかなりの

分量である。

この中には、郷土出

身者である国語・国文

学者の西尾実や童話作

家の岩崎雨村、あるい

は郷土史家の羽生英明

や俳人の平栗猪山等が

いて興味をそそられ

下伊那教育会発行の

『郷土読本』二二 鎌倉貞男

の歌人の短歌や、「旅

衣」と題して掲載され

た四人の俳人の俳句が

一番短い。反対に最も

長いのは島崎藤村の小

説「夜明け前」の一部

や、西尾実の「小さい

暗った話」と題する恵

心僧都の話である。岩

崎雨村(清美)の(郷

かと思うと、全国的

に著名で当地とは縁が

なさそうに思える、哲

学者の和辻哲郎・アラ

ラギ派歌人の島木赤彦

や齋藤茂吉・俳誌『層

雲』を主宰した荻原井

泉水や『石楠花』を主

宰した白田亜浪・さら

には文豪島崎藤村の作

品が掲載されていて一

層興味深い。

本や印刷物の少な

った時代、多くの人が

これをむさぼり読んだ

であろう。以来長い時

間が経過し、この読本

で学んだ人達もほとん

ど他界されてしまっ

た。同時に、右二冊の

読本はすっかり忘れ去

られて久しい。

それだけに、もしか

したら右の諸作品が郷

土出身者の作品である

ことや、下伊那に関連

する作品であることを

知る人も少ないのかも

知れない。そうであ

ればあるほど、折に触

てこうした作品に接

し、かつて我々の祖先

がこの地に生活し、

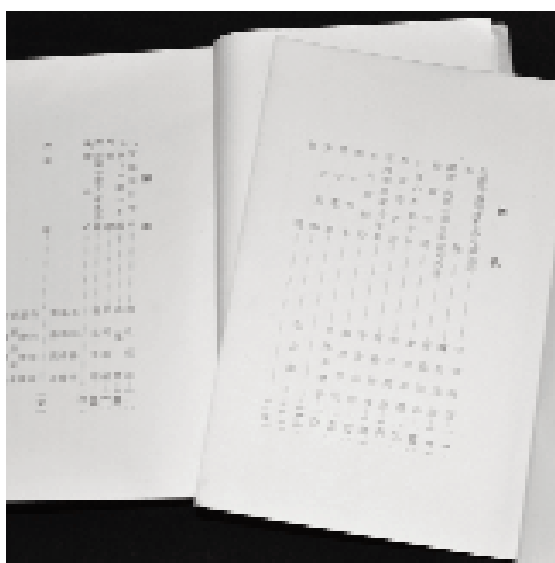
我々もまたここに育

れていることを思い、

郷土の文化を正しく理

解することも必要とな

らう。



下伊那教育会発行の「郷土読本」目次